




審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1379 号	氏名	不動 拓真
審査担当者	主査	川口 巧	(印) 
	副主査	田山 栄基	(印) 
	副主査	松瀬 博夫	(印) 
<p>主論文題目：</p> <p>Changes of improvement in upper limb function predict surgical outcome after laminoplasty in 1 year in patients with cervical spondylotic myelopathy: a retrospective study</p> <p>(上肢機能の改善から頸椎症性脊髄症患者における椎弓形成術後1年時の手術成績が予測できる：後ろ向き研究)</p>			

審査結果の要旨 (意見)

本論文は、頸椎症性脊髄症患者の術後1年後の治療成績に関わる短期指標を検討したものである。椎弓形成術を施行した104例を対象に決定木解析にて検討した結果、67歳以上では Δ Simple Test for Evaluating Hand Function (STEF)が、67歳未満では Δ 握力が術後1年後の身体機能改善に関わる指標であった。また、同様の結果はロジスティクス回帰分析でも得られた。本論文は、頸椎症性脊髄症患者の術後1年後の治療成績改善に、年齢・握力・STEFが関わることを明らかにしている。頸椎症性脊髄症患者における術後治療成績改善に貢献しうるものであり、学位に値するものである。

論文要旨

頸椎症性脊髄症患者における入院中の身体機能の変化と術後経過に関連する報告はなく、近年は医療費の問題のため入院期間が短縮される傾向にある。短い入院期間で予後予測するのは非常に困難である。そこで、我々は頸椎症性脊髄症の周術期における身体機能変化と治療成績の関係について調査した。

本研究は久留米大学病院整形外科にて同一術者が頸椎症性脊髄症に対して椎弓形成術を施行した104例を対象とした。身体機能は入院時と退院時にSTEF、握力、TUG、10m歩行、片脚起立時間を評価した。臨床成績は術前と術後1年後にJOAスコアを測定し、JOAスコア改善率50%以上を改善群と定義した。

改善群は31例、非改善群は73例であった。改善群で年齢が優位に若く、 Δ 握力と Δ STEFが優位に改善していた。年齢は罹病期間と有意な正の相関があった。JOA改善に関わる因子について、決定木解析を用いると年齢が最初の分岐変数となり67歳以上の15%にJOA改善が認められた。次いで Δ STEFが第2分岐因子となった。一方、67歳未満のグループでは50%にJOA改善が認められ、 Δ 握力が第2分岐因子となった。本研究では、改善群は下肢機能より上肢機能の方が術後早期から改善する傾向あり、入院中の上肢機能変化は術後1年時の成績と関連があった。さらに、年齢によって上肢機能の改善因子が異なり67歳未満では握力変化量、67歳以上の患者ではSTEF変化量が術後1年時の成績を反映することが明らかとなった。